令和7年度 学校評価 品川区立品川学園

評価項目1 （学力に関すること）

重点目標	○個に応じた学習および基礎・基本の定着 ①一人一人の学習の様子を複数の教師が把握し、基礎・基本の定着を図ることができるよう、第1～4学年は、学級担任によるスモールステップによる指導や習熟別少人数指導の効果的な実施、第5～9学年は、教科担任制、習熟度別少人数指導を効果的に実施し、自らの課題を克服する自学自習の能力の向上を図る。 ②「家庭学習の充実・習慣化」を図ることで、児童生徒の学びの質の向上と、基礎・基本の定着を図る。 ③学習の定着を図るために、小テストや定期考査（第5～9年）以外に、区の学力到達度調査の結果や、学校独自の学力調査の結果を用いて、学習の定着状況を把握する。そして、個に応じたPDCAサイクルを意識した計画や取組の管理を行うことで、児童生徒の学習意欲向上につなげる。

評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
基礎学力の推進	重点目標①②③に関わる成果指標 「区の学力調査」において、各学年のすべての教科で目標値を超えるようにする。	区の学力調査において、各学年概ね区平均を超えることができた。理科において目標達成は充分とはいえない。実験の考察等を通して、論理的な思考力を育成する必要がある。	B	「区の学力調査」において国語では「書くこと」の正答率が低く、漢字の無回答が多いという現状である。児童に合った学習方法を提供できるように、反復学習のみならず、タブレット学習等も活用して漢字の習得を図っていく。理科では、見えない現象を概念的に問う分野の理解が難しく、現象の理由を考察する力に課題がある。そのため、実験・考察の場面で見方・考え方を働かせる工夫をしていく。9年の社会で全国平均を下回る結果となり、特に歴史分野で課題が見られた。児童・生徒が興味をもって主体的に学習に時組むためにも、探究的な学びのスタイルを取り入れていく。 「家庭学習の充実・習慣化」のために、児童・生徒が学習状況を把握し、主体的に取り組む環境を作ることが必要である。そのため、タブレットを活用し家庭学習に取り組めるようにするとともに、学習への取組を自己調整できるように、フォーサイト手帳を活用させ、教員は活用のための支援をしていく。
	①「9年間を見通した系統立てた学び」 児童課程では学級担任によるスモールステップの指導を、生徒課程では教科担任制による専門的な指導を実施する。主体的・対話的で深い学びの実現に向け、与えられる学習から主体的な学びへの転換を一層推進し、探究的な学習や自由進度学習を取り入れる。	96%の教員が、「主体的・対話的で深い学びの実現に向け、与えられる学習から主体的な学びへの転換を一層推進し、探究的な学習や自由進度学習を取り入れましたか。」という質問に対して肯定的な回答をした。	A	
	②「家庭学習の充実・習慣化」 個別最適な学習を主体的に取り組むように支援していく。生徒課程では、ポートフォリオを作成することで、自らの学習状況を把握し、家庭での学習の進め方を調整できるようにしてく。また、小テストなどで、家庭学習の成果を発揮できる場面を設定することで、主体的に学習に取り組む態度を養う。	92%の教員が「家庭学習の充実・習慣化」を図ることで、児童生徒の学びの質の向上と、基礎・基本の定着を図りましたか。」という質問に対して肯定的な回答をし、89%の教員が「小テストなどで家庭学習の成果を発揮できる場面を設定しましたか。」という質問に肯定的な回答をした。96%の教員が主体的・対話的で深い学びの実現に向け、与えられる学習から主体的な学びへの転換を一層推進し、探究的な学習や自由進度学習を取り入れたことが分かる。	A	
	③「学習の定着」 定期テストでは、『学習の足跡』に目標・計画・振り返りを各々がすることで、自らの学びを調整する力を養う。学力テストは、面談で結果を返却することで、家庭と成果や課題を共有し、次の目標へと繋げていく。	89%の教員が「自らの学びを調整する力を養うために、『学習の足跡』に目標・計画・振り返りをさせたり、学力調査の結果を用いて、学習の定着状況を把握させましたか」という質問に肯定的な回答をした。区の学力調査の結果を夏休み期間の面談で保護者に渡して説明し、課題を共有することができた。	B	

A＝十分達成できた B＝おおむね達成できた C＝未達成

令和7年度 学校評価 品川区立品川学園

評価項目２ （人間性や社会性に関すること）

重点目標	○各ブロックごとに生活のきまりを守り、他者に優しくできる心情や実践力を培い、学校生活をよりよくする。 ・豊かな心を育むという指導を行う ・毎朝、規則正しい生活習慣を身に付けさせる。 ・児童・生徒や教員が、毎朝、正門に立ち、朝の挨拶をすることにより、挨拶の習慣を身に付けさせる。

評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
社会性人間性の育成	80%以上の児童・生徒が、生活指導部が定めた3つの重点項目の内容を実践できるようにする。（児童・生徒対象アンケート調査）	児童・生徒が、生活指導部が定めた3つの重点項目（豊かな心・規則正しい生活習慣・あいさつ）を実践できるように指導した。アンケート結果でも80%以上を達成した。	A	次年度はノーチャイムとなり、週番活動の在り方も変わるので、児童生徒会とも協力しながらあいさつ活動を行っていく。 発達指示的生徒指導を基盤に、普段から児童・生徒とのコミュニケーションを図ることで、子どもの変化に敏感に反応できるようにする。 ノーチャイム実施に伴い、全校朝礼などでも時間の管理について再度指導していく。
	・普段から児童・生徒とコミュニケーションを図るだけでなく、月一回の児童・生徒対象の教育相談アンケートを実施する。また、学年会や「なかよし会議」（いじめ対策委員会）で児童・生徒の情報を共有し、いじめの早期発見、未然防止に努めた指導を行う。	発達指示的生徒指導を基に普段から児童・生徒とのコミュニケーションを図ることができた。毎日のデイケン、月一回のいじめDアンケート等を実施し、いじめ問題に組織的に対応することができた。また、学年会や「なかよし会議」で児童・生徒の情報を共有し、いじめの早期発見、未然防止に努めた指導を行うことができた。	A	
	・毎朝、教師は児童・生徒と積極的に関わり、学習規律や時間の管理ができるように指導する。児童・生徒が朝読書をすすんで行い、落ち着いた雰囲気で学校生活をスタートできるように教員、児童、生徒相互で声かけを行う。また、始業のチャイムで授業をスタートし、児童・生徒が時間を守って生活できる環境を整える。	児童・生徒と積極的に関わり、学習規律や時間の管理ができるように指導した。ノーチャイムデーを設けることで、児童・生徒に自ら時間管理の大切さを考えさせることができた。委員会生徒を中心に、相互に声掛けを行うことで朝読書の習慣をつけることができた。教員が始業のチャイムを守ることで、児童・生徒に時間を守ることの大切さを伝えることができた。	A	
	・教員自らが挨拶を行うことで、児童・生徒がすすんで挨拶をする意識を育てる。また、挨拶や会釈のよさを実感させることで学校生活を活性化させる。担任や副担任が教室で児童・生徒を向かえ、挨拶や声かけを積極的に交わすことで、信頼関係を築く手立てとし、児童・生徒にとって安心できる環境をつくる。	週番活動を通して、教職員と生活委員があいさつ活動の活性化を促すとともに、児童・生徒にあいさつの習慣を身に着けさせることができた。休み時間等の校内移動時も教員自らが積極的にあいさつを行うことで、児童・生徒があいさつをする意識を育てることができた。	A	

A＝十分達成できた B＝おおむね達成できた C＝未達成

令和7年度　学校評価　品川区立品川学園

評価項目３（体力・健康に関すること）

重点目標	○すすんで運動したり、仲間や教師と交流したりし、心身ともに健康で安全・安心のある充実した学校生活を送る。 ・児童・生徒に、学習に必要な技能を身に付けたり、授業規律を統一させることで、児童・生徒に規範意識を身に付けさせたりする。 ・児童・生徒が自らの健康に関心をもち、自己管理能力を身に付け健康的な生活を送れるようにする。 ・年間を通して、健康な体づくりに興味・関心をもたせ、生涯を通じて運動し続ける素養を養う。

評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
健康、体つくりへの取組み	80%の以上の児童・生徒が、積極的に運動し、規則正しい生活や衛生、環境整備を意識しながら、すすんで自身の健康な心と体づくりを行えるようにする。	体育や品川タイム、休み時間の様子からすると、ほとんどの児童・生徒が、積極的に運動し、規則正しい生活や衛生、環境整備を意識しながら、すすんで自身の健康な心と体づくりを行えるようになった。しかし、一部の児童・生徒は、遅刻や寝不足等の体調不良を理由とした欠席がある。また、休み時間に運動せず教室で過ごす児童・生徒が一定数おり、特に冬場はその傾向が高い。	B	整列・礼法指導を行い、集団行動における決まり・「No voice移動」の意識を身に付けさせることができた。 運動できるよう声掛けを行い、体の基礎や柔軟性を培うことができた。また、姿勢保持の大切さを伝え、適切な授業態度を育てることができた。熱中症予防のために表示を掲示し誰でも確認できるようにした。 運動を習慣としない児童生徒に対し、いかに体を動かすことが必要かを伝える必要性を感じた。次年度以降は、このことを改善していきたい。
	・児童・生徒が集団で集まるときは、整列・礼法指導を行い、集団の決まりを身に付けさせる。また授業等でも姿勢保持など授業中の態度を指導し、行動化できるように日々指導する。整列の指導や教室移動、朝会等の移動時は静かに移動できるように意識付け、規律ある生活ができるようにする。	朝礼や各種式典など、児童・生徒が集団で集まるときは、整列・礼法指導を行い、集団行動における決まりを身に着けさせることができた。また日々の授業はもちろんのこと、ほけんだより等でも姿勢保持の大切さを伝え、適切な授業態度を育てることができた。常に「No voice移動」を意識付けし、静かに移動できるように指導することができた。	A	
	・品川タイムを活用し、体力や運動技能の基礎を身に付け、体の基礎を培う。またワンミニッツ・エクササイズを行い、体の柔軟性を養う。 ・体育的行事に積極的に参加し、昼休みなどの機会を生かしグラウンドやアリーナで運動するように指導や声掛けをする。	・体育授業や運動部活動、体力や運動技能の基礎を身に付け、体の基礎や柔軟性を培うことができた。 ・体育的行事への練習で、運動するよう指導や声掛けができた。	A	
	・児童・生徒が安全に休み時間をグランドやアリーナで運動できるように教員が指導や声掛けを行う。その際、熱中症予防など健康面も配慮する。 ・今年度は運動会で、体育科で培った体力や技能が発揮できるように取り組む。	・児童・生徒が安全に休み時間をグランドやアリーナで運動できるよう声掛けを行った。熱中症予防のためアリーナに表示を提示し、誰もが確認できるよう配慮した。 ・体育的行事で、体育科で培ったことが発揮できるよう取り組めた。	A	

A＝十分達成できた　B＝おおむね達成できた　C＝未達成

令和7年度　学校評価　品川区立品川学園

評価項目４（いじめの防止の取組に関すること）

重点目標	○いじめ防止の柱を、「いじめをしない、させない、許さない」という組織作りと、「よりよい人間関係の構築」の心の教育とする。 ①いじめの問題への対策は家庭や地域、関係機関と連携して取組み、いじめの防止、早期発見、いじめへの対処をより実効的なものにするため、いじめへの組織的な対応、重大事態への対処等に関する具体的な内容や運用を明らかにするとともに、これまでのいじめ対策の蓄積を生かした取組を実施する。 ②市民科の時間を要とした市民科教育と全教育活動を通して、相手を思う心と、自分の意見を尊重しつつ、他者の意見や思いを受け入れ行動できる態度を育む指導を行う。

評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
いじめの防止の取組に関すること	毎月１回の児童・生徒対象の教育相談アンケートを実施する。アンケートを有効活用し、いじめの未然防止・早期発見・早期対応に取り組む。児童・生徒と積極的に関係づくりを行い、現状や不安解消につながるようにする。80%以上の児童・生徒が友達と良好な関係をもてたり、学校生活が充実できるようにする。	毎月いじめDアンケート等を実施し、いじめの未然防止・早期発見・早期対応に取り組むことができた。また日々のデイケンも活用し、児童・生徒が充実した学校生活を送れるようにすることができた。	B	いじめDアンケート等の実施が計画的に行われるように、今年度途中から計画表を作成した。次年度もアンケート等がきちんと行われるように呼びかけ、いじめの早期発見につながるようにしていく。
	・普段から児童・生徒とコミュニケーションを図るだけでなく、学年会や毎月の「なかよし会議」（いじめ対策会議）で児童・生徒の情報を共有し、いじめの早期発見、未然防止に努めた指導を行う。さらに、自分が悩んだり困ったときは大人に相談したり、目安箱やアイシグナルを活用したりするよう指導し、SOSを出すことの重要性を理解させる。	日々の児童・生徒とのコミュニケーションのみならず、各種調査や学年会・「なかよし会議」等を活用して、いじめの早期発見・未然防止に努めた。SOSの出し方についての授業や、いじめに関する授業「トリプルチェンジ」を年3回以上行うとともに、全校集会等でもSOSを出すことの重要性を伝えることができた。	A	
よりよい人間関係の構築への取組に関すること	質問紙調査((2)-①～③)において、達成率を90%以上にする。 ①「自分の良い点を伸ばし、悪い点を改善しようとする」 ②「相手を思いやる行動をしようとする」 ③「相手の考えを受け入れ、尊重した行動をしようとする」 （児童・生徒対象アンケート調査）	児童・生徒アンケートの結果より、①の自分の良い点を伸ばし、悪い点を改善しようとすると肯定定期な回答をした児童・生徒は91%だった。②の相手を思いやる行動をしようとすると回答した児童・生徒は94%だった。③の相手の考えを受け入れ、尊重した行動をしようとすると回答した児童・生徒も94%だった。	A	質問紙調査の結果より、達成率90%を超えることができた。
	・道徳の教科書を活用した市民科授業、日常的に行う人権への配慮を意識した人権教育など、市民科全領域を柱とした全教育活動を通して、思いやりの心や人権尊重の精神を養い、道徳的実践力を身に付ける。 ・校外学習や宿泊的行事を通して公共マナーや社会に生きる一人としての行動を意識できるようにする。	市民科地区公開講座では、ウェルビーイングをテーマに道徳の教科書を活用した授業を展開したり、ふれあい月間では全児童・生徒が考えた人権標語を掲示し、年間を通して相手を思いやることの大切さを感じられるように取り組んできた。「あかちゃんふれあい授業」「福祉体験」等、ゲストティーチャーを活用して体験的で実感を伴うカリキュラム編成もおこなっており、偏見をなくす教育活動を今後ともなくしていく。また、社会や地域に生きる一人として、公共マナーについての指導をどの学年でも継続的	A	
	・対話やタブレットを活用した意見共有などを通し、児童生徒が互いを尊重しながら学び合える教育を全教育活動で進める。また、他者と共に学習活動を行う中で、新しい考えを生み出したり、新しく価値付けたりしながら、自分をよりよく変容できる姿を目指す。	自分の考えや意見を友達にすすんで伝えようとすることができた、と振り返ることができた児童・生徒は86%であり、友達の考えと自分の考えを比較しながら聞くことができたという児童・生徒は87%であった。友達と学び合う中で、考えを深めることができたと回答した児童・生徒は92%であったため、他者と共に学習活動を行う中で、新しい考えを生み出したり、新しく価値付けたりしながら、自分をよりよく変容するという目標は十分に達成できたといえる。	A	

A＝十分達成できた　B＝おおむね達成できた　C＝未達成

令和7年度　学校評価　品川区立品川学園

評価項目５　学校独自の特色ある教育活動

重点目標	○英語活動では、音声言語に関する能力やリタラシー（読み書き）の能力を高め、語彙を増やしたり、苦手意識をなくすことで、実際のコミュニケーションで活用することができるようにする。 ○地域人材活用を効果的に行い、コミュニティースクールとして品川学園独自のカリキュラムを充実させる。 ○児童・生徒のウェルビーイングの向上を図り、自己肯定感を高める。そのために、市民科一貫プランとして「郷土を愛し、自らと社会のウェルビーイング向上に貢献できる児童・生徒の育成を目指す。自主的な活動である「連合自治会・児童生徒会活動」を通して、地域や自らを取り巻く環境との関わりの中で問題解決能力を育み、よりよく生きるための学力を身に付けさせ、リーダーシップ能力の育成を図る。 ○品川区教育委員会主催のキャリア教育活動に加え、たてわりクラブ活動、児童生徒会活動、連合自治会活動、8学年における高校説明会参加など、9年間のつながりや特色あるキャリア教育を通して、児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育み、児童生徒の社会性・将来性を充実させる。

指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
学校独自の特色ある教育活動	質問紙調査（（7）-①～②）において達成率が80%以上になるようにする。 ①英語　知っている単語（英語で言える言葉）が増えた。 ②英語　知っている単語を使い、コミュニケーションをすることができた。	児童・生徒アンケートの結果より、①の知っている単語が増えたと肯定的な回答をした児童・生徒は90%だった。②の知っている単語を使い、コミュニケーションをすることを増えたと回答した生徒は85%であり達成できたといえる。	A	質問紙調査（児童・生徒アンケート）の結果より80%の達成率を超えることができた。知っている単語を使いコミュニケーションすることができるという児童・生徒が90%を超えられるように、授業内容を工夫していくとともに、イングリッシュキャラバン、イングリッシュデイを活用する。 CSコーディネータと連携して地域人材を活用し、さらにドリームジョブ等において、オンラインを活用した取組を行うことができたので、次年度以降継続していく。 クラブや行事において、義務教育学校の特色を生かして、たてわり班を作り、生徒が主体となって活動する環境を整え、一層リーダーシップを育むよう働きかけていく。 児童・生徒の社会性・将来性を充実させるために、ウェルビーイング・コンピテンシーを育成することとともに、フォーサイト手帳を活用し、主体性や自己調整力を育てる。
	授業の導入時に簡単なコミュニケーション活動を取り入れ、英語を使ってコミュニケーションすることの苦手意識をなくしていく。授業で音韻認識能力やリテラシー（読み書き）の能力を高める指導を行い、実際のコミュニケーションで活用することができるようにする。	教職員アンケートにより「英語を使ってコミュニケーションすることの苦手意識をなくすために、授業の導入時に簡単なコミュニケーション活動を取り入れていますか。」という質問に対して95%の教員が肯定的な回答をした。	A	
	地域人材を効果的に活用し、「地域とともにある学校づくり」を進める。実施後に教職員へのアンケートを行い、目的を十分に達成できたの割合が80%以上を目	CSコーディネーターと連携し、地域人材を効果的に活用し、「地域とともにある学校づくり」を進められましたか。という質問に対して、91%の教員が肯定的な回答をした。	A	
	CSコーディネーターと連携し、オンライン等も考慮しながら、体験的な学習活動を実施する。地域の環境や人材を活用した取組が80%以上実施できるようにする。	CSコーディネーターと体験的な学習活動を実施し、目的を十分に達成できましたか。という質問に対して、91%の教員が肯定的な回答をした。	A	
	・たてわりクラブ活動や行事等で、上級学年のリーダーシップを育む。	教職員アンケートにより、たてわりクラブ活動や行事等で、上級学年のリーダーシップを育むと回答した教員は95%だった。	A	
	・児童、生徒一人一人の勤労観、職業観を育み、社会性・将来性を充実させるために、学級内での係・当番活動で児童生徒が主体的に取組めるようにする。 ・教職員・児童生徒・保護者に対して、全学年で実施しているキャリアパスポート等を活用しながら、自分自身の振り返りをもたせることで、特に「自分のの意義の共通理解を図り、効果的に活用できるようにする。	教職員アンケートにより、児童、生徒一人一人の勤労観、職業観を育み、社会性・将来性を充実させるために、学級内での係・当番活動で児童生徒が主体的に取組めるようにしたと100%の教員が肯定的な回答をした。 キャリアパスポート等を活用しながら、児童・生徒に振り返らせることで、特に「自分の意義の共通理解を図り、効果的に活用できるようにしたと96%の教員が回答した。	A	

A＝十分達成できた　B＝おおむね達成できた　C＝未達成